

09-001 千歳館

山形市七日町四丁目8番2号

料亭 木造二階建 大正5年

明治13~14年頃、魚問屋を営んでいた澤渡吉兵衛が営業を開始した「さわたりや」を起源とする。明治44年の山形市北部を中心とする大火によって焼け落ちた後、大正4年に2代目吉兵衛が現在の地に再興した建物が現存する千歳館である。建物は、昭和初期の社交の舞台として賑わい、「鹿鳴館」のイメージを外観に漂わせる。第二次大戦後、米軍に接収されたが、昭和22年に営業を再開し、今日に至る。

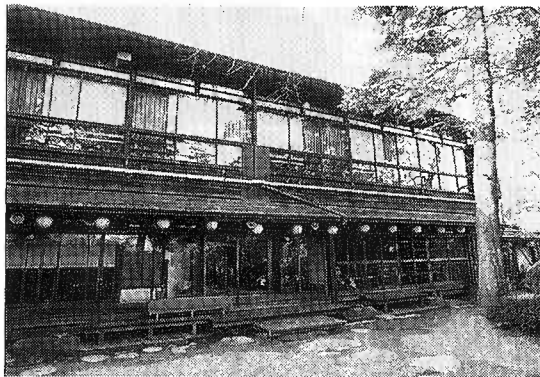
主屋は木造二階建てで、屋根は軒の出の少ない寄棟トタン葺である。外壁は明るい水色に塗られ、コーニスと窓周囲の化粧軸組の灰色との淡いコントラストが特徴的である。

正面の車寄せは切妻屋根であるが、その屋根を支える部材の構成は19世紀末のアメリカで流行した「スティックスタイル」に似て、線材を強調している。また柱の中間部が2本に分離し、軽快な印象を与えている。

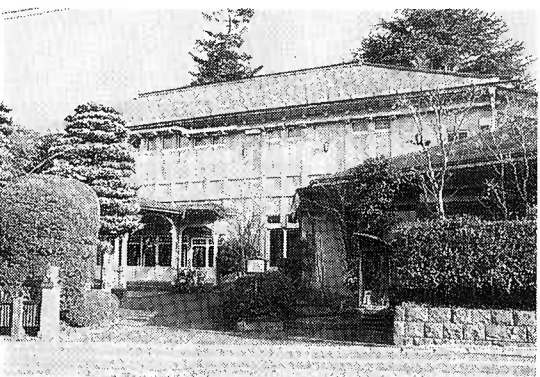
正面入口は、広く開け放たれる引き違いの建具によって和風的な玄関の雰囲気を出しているが、その上部2階の壁面は、間隔の短い柱とその間に配置された窓が垂直性を強調している。この縦長の開口部と軒下に設けられたモディリオンによって、建物全体の印象は洋風となっている。

入口からは、板敷きのホールから応接室（待合室）、さらにその先の庭までが一続きに見通せる。内部は外観と異なり、見つけ面積の大きい白壁の目立つ大味な和風造りとなっているが、高い竿縁天井が素朴さと開放感を与えている。

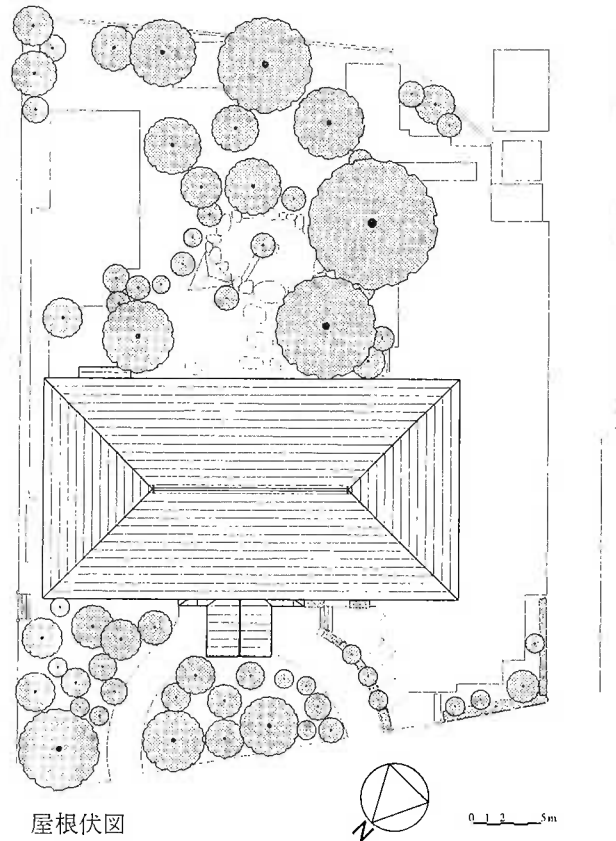
2階は40畳の部屋が3つ繋がった大広間となっている。南側に舞台があり、北側には4・9寸の桧の床柱の立つ床の間を構える。天井は猿頬面の格縁に杳目の杉板をはめた格天井で、天井高は12.9尺である。（山畑）



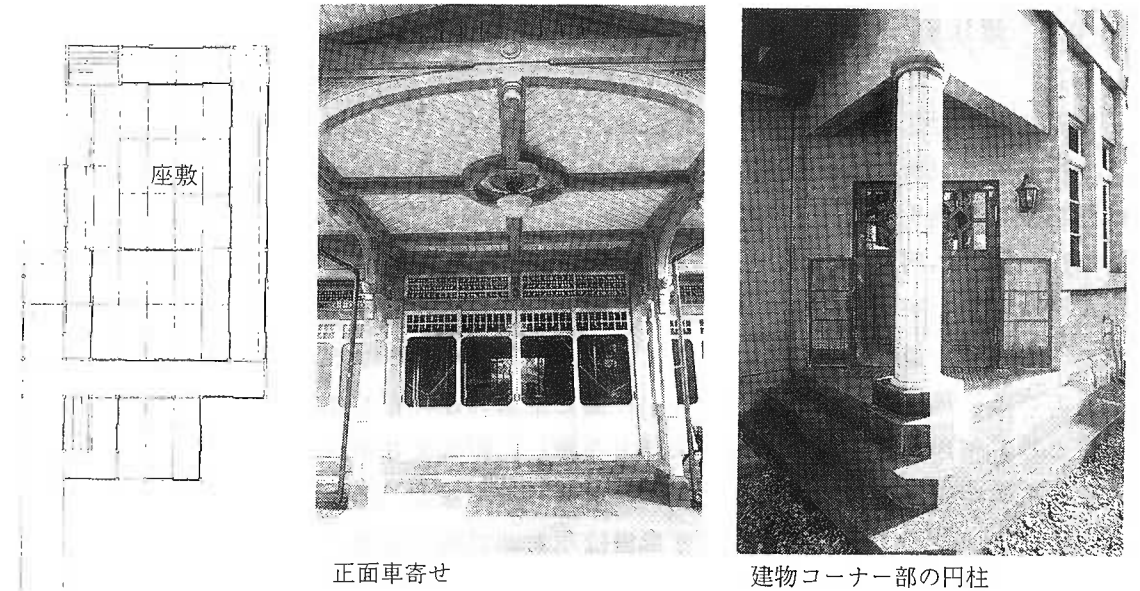
正面外観



庭側外観

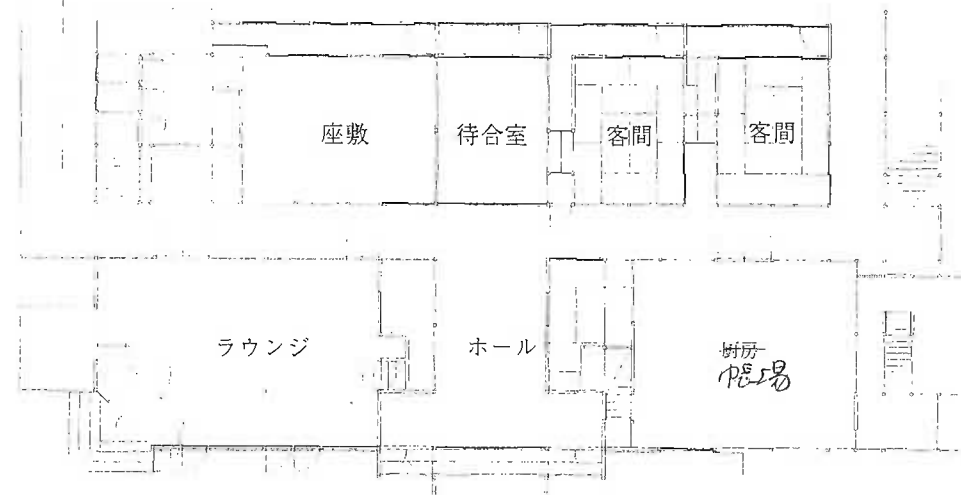


屋根伏図

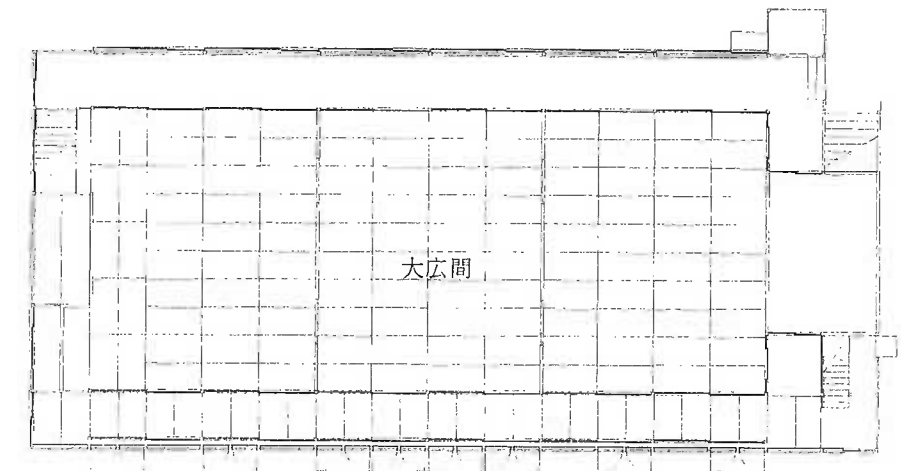


正面車寄せ

建物コーナー部の円柱



1階平面図



2階平面図

0 1 2 5m